

「ハレとケ」 通信

第5号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しむ暮らしをご提案する季刊誌です。

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築 (5)

鶏足山

金倉寺

天台寺門宗

「ハレとケ」のある暮らしかた

【この季節の楽しみ方色々】

花ある数寄屋 (5) 「敷石」

中津万象園「花の歳時記」(5) ヤブツバキ

かさねの色 (5) 「雪の下」



平成21年12月発行

表紙写真：四国の山、12月の寒い夕。苔に付いた水滴が凍り付いていた。

「鶏足山 金倉寺 天台寺門宗」

―名刹復興にかける―

歌舞伎十八番の内に、「勸進帳」という話がある。

源頼朝の怒りを買った源義経一行が、山伏に身をやつして奥州へ逃げようとしたところ、安宅の関で関守の富樫左衛門に呼び止められる。富樫は一行が義経らであると感づきながらも、義経を打撃してでも疑いを晴らすとする弁慶の誠と、黙って弁慶を信じる義経の様子に心を打たれ、その心情を思いやつて、騙されたかりをして逃がしてやる…という一幕である。

この芝居の題名にもなっているのが、今では聞き慣れない、^{かんじん}勸進という言葉。

もともとは僧侶が衆生の救済のために行う活動をさすものだったが、のちに、寺院・仏像などの建立、修復の為に浄財の寄付を求める行為をさす言葉となった。なかでも最も衆目を集めたのは、平氏の焼き討ちにより灰燼に帰した「東大寺」の復興の勸進活動である。後白河法皇の号令の下、重源を大勸進長に行われたこの大規模な勸進活動により、再興に必要な資金が集まり、それを元手に技術者・職人が実際の再建事業に従事、その働きによって東大寺は再建されたのだ。

右記の芝居の中にも、山伏を演じる弁慶が、あり合わせの巻物を山伏の行脚の証拠、「勸進帳」であると偽って朗々と読み上げてみせる場面がある。この「勸進帳」こそが、焼失した東大寺再建のためのものであった。

今回の「物語のある建築」は、この【勸進】を彷彿とさせる、

金倉寺住職・村上法照氏の「物語」である。

善通寺市にある「天台寺門宗鶏足山金倉寺」はいわゆる檀家寺ではなく、寺領を持った寺として宝亀5年(七七四年)に開山された、天台宗寺門派の寺だ。(四国霊場第76番札所)

開山したのは智証大師(天台宗比叡山延暦寺五代座主。弘法大師の甥「姪の子」としても知られる)の祖父・和氣道善

延長6年(九二八年)に醍醐天皇により「金倉寺」と改称されてから、全盛期には「境内南北二里東西里餘(余)神祠仏閣数十字僧坊百三十二ヶ院あり」「原田・木徳・垂水・岸上・真野の五郷を寺領に充て勤務の大衆千餘(余)人あり」と描写される威容を誇ったという。

また、金倉寺は訶利帝母尊(鬼子母神)日本最初出現の地と伝えられており、訶利帝堂の本尊として祀られる他、本堂の本尊・薬師如来は智証大師の作という由緒ある寺である。

しかし、建武の争乱時に略奪に遭い、永正文の兵火で伽藍が焼失。多くの寺領や建物、宝物を失ったものの、幸い本尊は残され、一〇〇余年を経た後に、寛永の末、松平頼重候により再建、復興を果たした。

その金倉寺へ、現住職の村上法照氏が赴任したのは昭和47年のこと。隆盛を誇った金倉寺も、当時は見る影もなく寂れ、

松が生い茂り、雨もれしないお堂はないというくらい傷んでいた。

「格式のある寺で嬉しいように思えるけれど、実際に金倉寺を目にしたら、『はい』との返事をためらった。結局、住職候補として向かうまでに、一年くらいは返事を留保していたかな。(村上氏)」。

そもそも村上住職は愛媛県の宇和島出身で、金倉寺に縁があった、というわけではない。前三代まで妻帯が禁じられていた金倉寺では、現在に至るまで血縁で後を継いだ例が無く、また、施設も老朽化が激しく檀家数も少なかったことから、次期住職が決まらず、総代が総本山園城寺(おんじょうじ)三井寺へ相談。結果、白羽の矢が立ったのが、村上住職だった。

そんな村上氏が住職となったのは、昭和51年。当時、34歳の若さだった。赴任後は、客殿の隅で寝泊まりをする日々。明治には乃木將軍の宿泊所となった客殿も、雨の日には雨滴受けの輦(たて)がずらりと並ぶほど、傷みが激しかったという。事実、昭和61年に当社がこの客殿の改修を行った際には、建物全体が歪み、建具は上下で10センチほどの隙間が出来て閉まらな。おまけに、地盤が悪く、沈下した建物をジャッキで上げようとするばかりで基礎の石が沈んでいくような、そんな有様だった。

「寺領」を失った寺にとり、「檀家」が少な



↑ 本堂正面。

していたという。結局、5年かけて建築を行い、借入金も7年で返済し終えた。「10年よりは早かったな。」と村上氏は笑う。

さて、金倉寺の本堂の前に立ち、じっくりとその建物を眺めたとき、何か気付くことはあるだろうか？

実はこの本堂は、桧などよく日本建築に使われる木材で出来ている訳ではない。使われているのは、アサメラ（アフロモシア）というマメ科の広葉樹の材木である。その特長は“重硬で木理は交錯している”とされ、固い上に目が通っていないという、まさに大工泣かせとも言える材料だ。

い」ということは、寺社建築のための資金が集まりにくい、ということでもある。しかし、このまま手を拱いていては金倉寺は荒んでしまう。村上住職は本堂建設の必要性を痛切に感じていたものの、富士建設との工事請負契約を交わす直前まで迷いつづけていたという。

悩む住職の背中を押したのは、総代の、「あなたが契約書に印を押さなければ、いつまで経っても建築はできん。思い切って押せ。」この言葉だった。10年かけて資金を集めよう、資金がなくなつたところで建築を中断して休んでも構わない…、そんな覚悟で臨む住職を助けるため、総代は密かに自分の田畑を売る心づもりさえ

余所の寺の住職、設計家等全国から見学にやつてきたという。

材料が決まり、和気総代から“気骨があつて間違いない”と推薦された富岡設計士に設計を依頼。

「設計中、『資金がないなら、もつと建物小さくしては…』と何度も言われたが、現在の仁王門の辺りから建設予定地を眺めたら、どうしてもこの大きさじゃなければ似合わない。何度考えても、何度イメージしても、やっぱり今の大きさじゃなきゃいけない。」（村上氏）

本堂新築当初から金倉寺全体の復興後のイメージが出来上がっていた…という村上住職は、度々の忠告にも譲らなかった。

本堂のイメージは、本山である天台寺門宗総本山園城寺（三井寺）である。あの美しい檜皮葺の国宝の建物の屋根に強い印象を受けていた村上氏が、ぜひにと望み、三井寺をひとまわり小さくしたような建物である、同じく天台宗の湖東三山西明寺を参考に、瓦葺きで同様の屋根のラインを再現した。そして設計ができ、施工する工務店を入札で決定。落札したのが当社、富士建設だった。

「富士建設が落札したけれど、当時おたくは竹林寺の五重塔の建立中。もう少しでできるから、それが完成してから…ということ、少し待たされた。あんな台風銀座の所に本当に五重塔なんて建つ

かな、と思ってみていたら、無事に建つたので、今の太櫓の木のあるところに大工小屋を建て、工事を始めた。忘れもしない昭和57年に完成、58年に落慶法要を行った。（村上氏）」

金倉寺の棟梁を担当したのは、京都宇治の宮大工・岩上政雄氏。竹林寺の五重塔の棟梁と同じである。宮大工で名を馳せた西岡常一棟梁と同僚だったという岩上氏は、「腕は西岡に負けん」と誇っていたというが、大工泣かせのアサメラを使う金倉寺本堂にはびつたりの棟梁だったのでないだろうか。



↑ この角度から見る本堂が一番美しい、と村上住職は言う。



↑ 古い客殿(左側の建物)の写真



↑ 乃木大将に係る様々な資料も残されている。

「最初にアサメラの材木が運ばれてきたとき、八角形に製材してあった。あれ、丸じゃなくて八角形か...と思っていたら、現地で鉋で丸く仕上げ始めたので、正直なところ驚いた。でも、見ていると、8角形を16角形に、16角形を32角形に...とどんどん繰り返し返していつて、とうとう丸くしてしまっただけでかかっているけど、だいたい、アサメラは、固い上に目も通っていない、板を割ろうと思っても、まっすぐに割れない、そんな木だったんだから、凄いものだと感じた。(村上氏)」

アサメラという材料の使い方にも大胆さを発揮した村上住職は、本堂の設計にも本領をみせる。それは、本堂内の御本尊の配置である。

通常、密教様式の建物の場合、棟の中心に御本尊がくる。つまり、お堂自体が仏様のもの、一般の人がお堂に入って何かをするようには作られないのだ。しかし、村上住職は、それでは使い勝手が悪い...と北の須弥壇に仏様が来るように改革。結果、お堂に人が入れる寺の本堂としては四国でも1、2を争う広さを有する本堂となった。

そして昭和57年にいよいよ本堂が完成。昭和58年11月に落慶法要を行ったが、翌月17日に茶室が火事になった。富士建設、富岡設計、市の職員、近所の人...大勢が心配して駆けつけた。

「そばにある消火器を使って消火に努めたけれど、火が消えないうちに消化液が無くなった。いよいよダメか...と思ったときに、消防車が来た。ところが、順調に消火できて一安心...と思ったら庫裏の屋根裏に火が回っていて、気が付くのが遅かったものだから、屋根裏は炭になった。虫が付かなくて良い...といえは聞こえはいいけれど、やはり驚いたな。(村上氏)」

本堂完成にはぎづけたものの、平成元年には智証大師千百年御遠忌の法要を控えている。続いて客殿の修復に取りかからねばならない。総代と共に「勸進」に回る日々を、「今はとてもあんなことできない。若さもあつたんだろうな。」と村上住職は振り返る。そして客殿が完成、無事に智証大師千百年御遠忌の法要を盛大に終えた。

その後、本堂新築時に頭に描いていた金倉寺復興後の姿を胸に、33年の歳月をかけて十二面観音を納めた観音堂の再建(結果的にはほぼ新築となる)、訶利帝堂移築・修理、仁王門再建、祖師堂(智証大師、神変大菩薩(役行者)等)の改修...とその夢を実現していく。村上住職の半生は、まさに、名刹の復興にかけた三十三年間だ。

寺にとつて50年、100年はあつという間。金倉寺も、開山以来千二百三

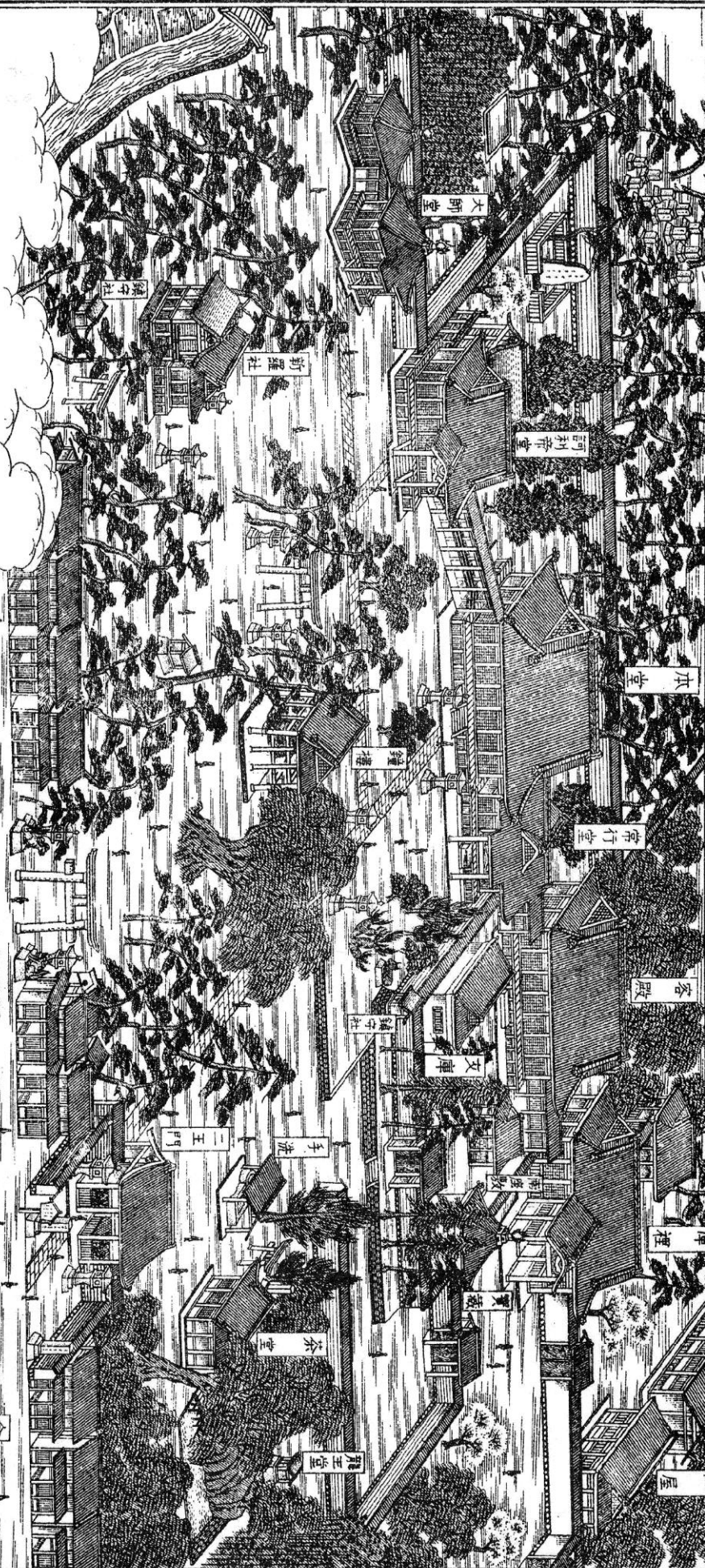


十五年を数える。

「八十八ヶ寺の調査の一環で、金倉寺の調査を本年しに来た人がいたが、当寺に残されている「書き物」の量は圧倒的に多いらしい。その書き物を見たら、安政年間に客殿を建立した際のことまで載っていた。(村上氏)」

村上法照住職が残した金倉寺の数々の建物とその記録も、100年後、200年後、後世に語り継がれる金倉寺の歴史の一部となるにちがいない。

四国霊場第6番札所
別格本山 金倉寺
善通寺市金蔵寺町二二六〇

[illegible]

この季節を暮らす。(5) 【これから季節の楽しみ色々】



冬から春に向けてのこの季節は、あちこちで色々な楽しみが見つかる頃。

きらきらと輝く霜の降りた朝、香りの良い梅や沈丁花の開花、ふきのとうや球根の芽が顔を覗かせる日…。

その嬉しさを、おすそ分けです。

- ① ツバキの花 ② クリスマスと冬の干菓子 ③ 季節の和盆 ④⑤ フユイチゴ ⑥ フユイチゴを寒天菓子に ⑦ 霜の降りた草むら
- ⑧ フキノウ ⑨ 梅がほころぶ ⑩ 満開の梅 ⑪ ポケの花 ⑫ 桃の花 ⑬ 沈丁花 ⑭ 水仙と菜の花

花ある数寄屋（5）

わたしたちが提案したいのは、依頼主の美学を反映した空間、
品格・調和・色気・遊び・技をキーワードに、
数寄屋の魅力を紹介します。

「敷石」



門から玄關まで、また、庭の敷設用に置かれた「敷石」。
庭、アプローチの点景としての役割はもちろん、歩くひとの
目線を惹きつけ視線をあやつるのも敷石の役割と言えます。

日本の建築や美術には、書道の楷書（真）・行書（行）・草書
（草）のように、「真・行・草」の考え方が全般的に見られます
が、この敷石も例外ではありません。

切石（加工石）のみを用いて幾何学的に意匠した真体、自然
石のみを用いた草体、切石と自然石をミックスさせた行体、と
大きく分けて3つのスタイルがあります。

単純なようですが、たとえば瓦を埋め込んだり、色味の違
う石を組み合わせたたり…、個性を出しやすく様々なアレンジ
が効くのも、敷石の魅力ではないでしょうか？ 南禅寺の敷石
など、古いものにもどこかしら凛とした美しさを漂わせるも
のも多く、興味を持ちはじめるとあちこちで素敵なおデザイン
の敷石に気がきます。

さて、上の写真を見ていると、なんだか、自分でもデザイン
できそうな気分になつてきませんか？ お家のデザイン、お庭
のデザインを考えると、ぜひ、「敷石」にも注目してみてください
くださいね。

「花の歳時記」

(5) ヤブツバキ

池泉の最も奥まった位置(西北端)に、昔から尊崇されている石投げ地藏尊の祠があります。この付近は、樹齢250年前後のクロマツの巨木が最も多く生育しています。そしてその高木の松の下で共生しているのが、亜高木のヤブツバキであります。

瀬戸の松籟にじっと耐え抜き、春の到来を今か今かと待ちわびていたかのように、紅色の大輪の花弁を大空に向けて力一杯開くヤブツバキ。まことに『いじらしい』植物の生命力ではありませんか。ところで古来の日本人は春に咲く木という意味で、現在一般に使用されている「椿」という和製漢字を作り出しました。

このツバキはサクラと並んで日本を代表する生粋の日本原産の樹木で、万葉集に数多く詠まれています。その当時のツバキの種類は殆どが野生種のヤブツバキでありました。

このヤブツバキは本州・四国・九州(特に西日本の温暖地帯)の海岸沿いの照葉樹林に多く自生しています。

なおツバキの名前の由来は、葉が厚くて艶があることから「厚葉木」「艶葉木」が訛ってツバキになったと言われています。

巨勢山の つらつら椿 つらつらに

見つと思はな 巨勢の春野を

(万葉集巻二一五四 坂門人足)

巨勢山の沢山の椿よ。今はまだ秋景色だが、心ゆくまで楽しみたいものだ。一斉に椿の花の咲いた美しい巨勢の春野のさまを。

(長岡 公)

＜中津万象園・丸亀美術館へのアクセス＞
瀬戸中央道路 坂出北ICより約8.5km／約15分
坂出ICより約14km／約20分
高速道路善通寺ICより約5km 約10分



【長岡 公 氏】

昭和2年10月 香川県丸亀市津森町に生まれる。
昭和26年3月 鹿児島大学鹿児島農林専門学校農学科卒業
昭和26年4月以降 香川県公立高等学校教員として
主基高等学校・飯山高等学校・笠田高等学校
・農業経営高等学校教諭、高松南高等学校
・飯山高等学校教頭
昭和63年3月 定年退職 香川西高等学校教頭
現 在 (財)中津万象園保勝会 理事
※主な著書に「讃岐の名園紀行」(栗林 玉藻編／中・西讃編)がある。

古来より季節を感じさせた「色」を知る。

かさねの色(5)

「雪の下」

日本人の季節を感じる心、美しいと感じる色彩感覚。

そういったものの結晶とも言える「重色目(かさねいろめ)」

は、平安時代に生まれ、季節の移り変わりを表現する配色として併せ仕立ての着物などに用いられました。現代でもしつらえなどにいかして、平安の風雅を味わってみては…。

表：白／裏：紅梅
着用時期は冬。
「雪の下紅梅」と言われ、
雪に埋もれた紅梅の
花を表した色目。
室町時代に生まれたとされる。

【編集後記】

富士建設のことをもっと好きになっ
てほしい、建設業の素晴らしさをもっと知ってほしい…と
始めたこの通信も、早一年となりました。これまで4つの
『物語のある建築』をご紹介しましたが、いかがでした
か。建築主の皆さまの熱い思いが伝わっていると良いナ、
と思っています。私にとっても、皆さまの夢や歴史のお話
をうかがえて、とても幸せな一年でした。

お客さまにベストの品質、価格をご提案する。それは
建設会社として当然のことです。でもその上で、お互いに
「あなたと一緒に仕事がしたい。だって、信頼している
し、好きだから。」と大切に思い合ってお仕事に臨みたい。
：ワガママなようですが、私は、いつもそう思っています。
だって、大好きな人が夢を叶えようと頑張っているなら応援
したいし、信頼しているからこそ一緒に何かをしたい。
その気持ちは、当たり前のものでしょね？
その思いが、ひとつひとつのお仕事をさらに大切な幸せな
ものへと変えていくんだと、信じています。

大好きな相手のため、「自分を信じてくれる誰かのため」
なら、人間はものすごくがんばれる！

「好き」は、どんなときでも、魔法のことばですネ。

*****御意見、御感想をお聞かせ下さい*****



建設業許可：香川県知事許可(特18)第189号
／一級建築士事務所：香川県知事登録 第416号
号／宅地建物取引業免許：香川県知事登録
(10)第1997号

富士建設株式会社

本社：〒769-1101
三豊市詫間町詫間 300 番地 1
TEL0875-83-2588(0120-832589)
FAX0875-83-5864
http://www.fujikensetsu.jp
mail y-manabe@fujikensetsu.jp (真鍋有紀子)

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。また、県下において1300区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

■営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所

■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処 懐風亭